



TITLE:

マア語 (Ma'a/Mbugu) の記述研究
一文法と社会言語学的考察―(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

安部, 麻矢

CITATION:

安部, 麻矢. マア語 (Ma'a/Mbugu) の記述研究 一文法と社会言語学的考察―. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12988>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	安部 麻矢
論文題目	マア語 (Ma'a/Mbugu) の記述研究 ―文法と社会言語学的考察―		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、タンザニア北東部、タンガ州の西ウサンバラ山塊一帯に居住するマア (Ma'a. Mbuguとも) の人々の民族語であるマア語を対象にしている。マア語には、内マア語 (スワヒリ語で<i>Kimbugu cha ndani</i>) と呼ばれる変種と、外マア語 (スワヒリ語で<i>Kimbugu cha kawaisa</i>) と呼ばれる変種がみとめられる。このうち内マア語は、19世紀末より周辺のパントゥ系言語とは異なる構造を持つことが知られている。多くのパントゥ諸語に見られる名詞クラスと動詞類接頭辞との一致 (agreement) システムを持ちながら、非パントゥ系起源であると見られる語彙を多く有することから、言語接触により成立したと考えられている。20世紀後半からは、言語接触の研究領域でしばしば取り上げられ、論じられてきた。一方の外マア語は、パントゥ諸語のひとつであるパレ語 (スワヒリ語で <i>Kipare</i>、G.22) と非常に類似しているといわれてきた言語であるが、1970年代に入るまで詳しく言及されたことはなく、現段階でも詳しい記述はほとんどない。これら2つの言語の構造を比較すると、名詞クラスの接頭辞や動詞類接頭辞などの形式はほぼ同一で、差異は主に語彙 (特に内容語) の面にみられることがわかる。</p> <p>先行研究においては、このどちらもが彼ら固有の言語とみなされ、どちらも第一言語として話されるとされていた。しかし、この2つの変種の、マアのコミュニティにおける共存の状況、つまり人々の運用能力や使用状況などについての詳細は明らかではなかった。</p> <p>このような背景から、本論文では、2つの変種の文法記述を行い、詳細な言語資料を提示すること、またそれにより2つの変種の共通点と差異を明らかにすることを第一の目的とし、マアのコミュニティにおける2つの変種の使用状況に関して、社会言語学的考察を行うことを第二の目的とする。</p> <p>本論文は以下のように構成されている。Ⅰ部は本論への導入として、マア語についての先行研究を概説し、問題点を明確にする。また、本論文で記述・分析の対象となる、マアの人々とマア語の資料を収集した、筆者の現地調査についての説明を行う。Ⅱ部はマア語の文法記述を行い、そののちに2つの変種の構造を比較し、内マア語と外マア語の差異と共通点を明らかにする。Ⅲ部はマアの人々の言語使用の面から、2つの変種の社会言語学的位置づけについて記述し、分析を行う。Ⅳ部は総括として、各章の議論をまとめている。</p> <p>Ⅰ部は第1章と第2章から成り、マア語とマアの人々に関する研究の背景を概観し、</p>			

筆者の行った現地調査についての概略を述べている。

第1章では、研究の背景と目的について述べている。まず、本論文で対象とする民族と彼らの言語の呼称について、先行研究における呼称の変遷を概観したのち、本論文での呼称について説明している。本論で対象とする民族についての自称であることから、民族についてはマア、言語についてはマア語と呼ぶこととする。また、マア語には2つの変種があるが、マアの人々による呼び方に倣い、言語接触により成立したと言われる変種を内マア語、バントゥ系言語のパレ語と非常に類似した変種を外マア語と呼ぶこととする。また、マアの人々の居住地について、先行研究の記述を参照しつつ、地図で示した。現在、マアの人々がまとまった人数で住んでいると確認できるのは、大きく分けて4ヶ所である。1.4では、本論文でマア語の使用について分析するにあたり、タンザニアの言語状況について概説している。タンザニアは、他のほとんどのアフリカ諸国と同様に、多民族・多言語国家であり、国家語のスワヒリ語、公用語の英語、そして120を超える民族語の、それぞれの使用領域がある程度分かれた、ポリグロッシュ社会である。

上記のとおり、マア語とマアの人々について概説したうえで、1.5では先行研究について、20世紀前半までと20世紀後半以降とに分けて概観し、その議論をまとめ、問題点を明らかにしている。先行研究でもっぱら議論の対象となってきたのは内マア語のみであり、外マア語について言及した文献は少なく、内マア語と外マア語の関係は、社会言語学的にも、記述言語学的にも、明らかではなかった。マア語についての最も詳細な文法記述はMous (2003a) であるが、ここでも社会言語学的側面についての言及はほとんどない。このような状況から、内マア語と外マア語の詳細な文法記述をし、差異と共通点を明らかにすることとマア語についての社会言語学的考察を行うことには大きな意義があることを示している。

第2章は、筆者が行った現地調査についての詳細である。本論文におけるマアの人々および彼らの言語についての資料は、筆者が行った現地調査によって収集したものである。この、マア語とマアの人々に関する現地調査に関して、調査期間、調査地、調査方法、調査に使用した調査表、コンサルタントなどの情報を提示している。現地調査は2000年以来10回、計2年4ヶ月にわたり行っている。

II部は、第3章から第7章までの文法記述と、第8章の内マア語と外マア語の比較・対照の2つで構成されている。第3章から第7章では、マア語の文法について、内マア語と外マア語の共通点と差異を明らかにすることを主眼に置きながら、詳細な記述を試み、それをもとに、第8章において、内マア語と外マア語の文法について、比較している。

第3章は、音韻に関する記述である。まず、マア語の音素目録を例とともに提示する。また、音節についても記述している。トーンは本論文では詳細に記述・議論せず、トーンの表記は音声レベルの表記をすることとする。

第4章は、名詞および名詞修飾類に関する記述である。4.1では、人称についての記述を行っている。4.2において、マア語の名詞がバントゥ系に見られる名詞クラスを持ち、名詞クラスと名詞類接頭辞の一致システムを持つことを示し、具体的な形式を提示している。内マア語と外マア語は、名詞クラスの接頭辞の形式や名詞類接頭辞については、同一のものを有していることを確認している。

4.3から4.6において、人称代名詞や形容詞、数詞、所有詞、指示詞について、内マア語と外マア語とで異なる形式を有していることを、例示とともに記述している。

第5章は、動詞構造についての記述である。まず、5.1では、動詞内の、目的語接頭辞による目的語の標示について記述したのち、5.2では動詞派生接尾辞、5.3ではテンス・アスペクト体系についての記述を行っている。

動詞派生接尾辞については、内マア語と外マア語は、ほぼ同じ形式を有している。唯一の例外は、使役形にみられる、生産的ではない、*-ti-*という接尾辞である。また、同じく使役形に関して、接尾辞であると結論付けるには例が少ないが、動詞の自他にかかわっていると思われる語尾の形式についても言及している。

テンス・アスペクト体系については、Mous (2003a) の挙げるテンス・アスペクトとその標識の形式をつど参照しながら、例示と共に記述している。では、主にMous (2003a) が挙げたテンス・アスペクトとその標識との比較を行っている。特に、Mousがテンス・アスペクトとして挙げている3つの「標識」について、より詳しい記述をしたうえで、分析と考察を行い、これらはテンス・アスペクト標識として文法化する過程の途中にあると論じている。

第6章は、語順・単文・法に関する記述である。マア語の基本語順はSVOである。Vのみが必須要素で、SとOは、1人称と2人称の場合や、コンテキストでそれらが明らかでない場合には随機的要素である。また、SとOを省略した場合、特にSやOが人間を表す名詞の場合は、動詞内で主語接頭辞と目的語接頭辞により標示される。

文については、6.3で動詞文、6.4で特殊な文、6.5で命令法、6.6で接続法を記述している。動詞文の構造は、内マア語と外マア語はほぼ同じ構造を有しているが、疑問文にあらわれる疑問詞は、内マア語と外マア語では、異なる形式を持っていることを例示により記述している。特殊な文については、繫辞文・所有文・存在文の記述を行っている。繫辞文は、現在の繫辞文の形式は内マア語・外マア語ともに同じ形式であるが、過去と未来の形式は異なるのを有している。所有文については、「持つ」を表す動詞が、内マア語と外マア語とで異なる形式ではあるが、構造そのものは、内マア語と外マア語は、同じものを持っている。最後に、存在文については、「いる・ある」を表す動詞が、内マア語と外マア語とで異なる形式を持つが、構造そのものは、内マア語と外マア語は同じものを有している。ただし、過去の存在文では、「過去」を表すテンス・アスペクト標識のほか、「継続」を表すテンス・アスペクト標識があらわれるが、そのあらわれが、内マア語と外マア語で異なる。

第7章は、関係節・条件節・ときを表す節の記述である。

7.1では、関係節について記述している。先行研究では、関係節についてはほとんど記述がない。マア語には、明示的な関係節標識を持たないものと、関係代名詞をもつものの2つの関係節の構造が見られ、関係代名詞には、マア語独自のものと、スワヒリ語に見られる、*aNba-* RCがあり、総じて3つの形式を持つ。それぞれの関係節について、テンス・アスペクト標識と、主要部の、関係節内の統語的役割によるあらわれの違いを明らかにしている。

7.2では、条件節について、仮定と反実のふたつの形式について記述している。特に反実の条件節については、主節では否定辞として用いられる *-see-* が、反実の条件節では、反実を表す標識として、帰結節にあらわれる。

7.3の、ときを表す節については、Mous (2003a) の記述とは異なる構造が見られる。過去に事態が起こったときを表す際には、Mousは *-he-* という「過去の条件」を表すテンス・アスペクト標識を用いると述べているが、筆者の2003年以降の現地調査においては、*-he-* ではなく、「継続」のテンス・アスペクト標識 *-re-* を用いた形式が収集されている。また、現在と未来については、「条件および進行」のテンス・アスペクト標識 *-kú-* が用いられる。

第8章では、第3章から第7章にかけて記述したマア語の文法の、内マア語と外マア語との比較を行っている。

文法に関しては、基層がバントゥ系言語のものであることは異論がないだろう。人称代名詞や形容詞、指示詞、数詞などの形式いくつかの文法範疇においては、内マア語と外マア語とで差異が見られる。ただし、形態・統語の体系は、内マア語と外マア語は、おおむね同じであり、現段階では、ふたつの変種は、それぞれに別の文法を持っているとまではいえない。

Ⅲ部は社会言語学的考察で、第9章のみで構成されている。

第9章では、マア語の社会言語学的状況について、考察している。

まず、9.1で、マア語が持つ社会機能について考察している。マア語のような「混合言語」と言われる他の言語の社会言語学的状況を概観したのち、*manipulated languages* のもつ社会機能についても概観し、内マア語と外マア語の社会言語学的状況について、以下の5つの可能性を挙げている。

- a. 異民族婚の人々のアイデンティティを表すために成立し、話される。
- b. 秘密語として用いられる。
- c. 使用する人々が限定されている。
- d. 使用される場面が限定されている。
- e. 内マア語と外マア語は、それぞれ別の人（もしくは集団）に民族語として話されている。

a. については、マアの人々が異民族婚により生じたという記述は先行研究にも見られず、否定される。bからeについては、9.2の議論ののちに考察している。

9.2では、マアの人々のマア語の使用について、質問表による聞き取り調査の結果を分析し考察したのち、話者の日常会話の観察を分析・考察し、それらをもとに、社会言語学的考察を行っている。その結果、すべてのマアの人々が、ウサンバラの圧倒的多数派民族であるシャンバーの民族語であるシャンバー語を話すことも明らかにしている。マアの人々はシャンバーの人々の前とはシャンバー語で話し、自分たちの会話の内容を隠すという行動をとらない。ここから、上記の可能性のうち、bのマア語が秘密語として機能している可能性が否定される。また、内マア語と外マア語の使用については、内マア語、外マア語はどちらも男女共に話され、会話の内容に制限がなく、使用の場にも制限がないこと、母語話者がいること、外マア語がすべてのマアの人々に習得されていることを明らかにしている。これにより、上記の可能性のうち、cとdが否定される。また、マアの人々の中には、内マア語を話せる人たちと話せない人たちがおり、内マア語話者は外マア語話者とは外マア語で話す。この点から、上記の可能性のうち、eの、内マア語と外マア語は別々の集団に民族語として話されているというのが、今のマアのコミュニティの状況を最もよく表していると分析している。以上の議論から、内マア語と外マア語は、社会的にはそれぞれ別個の言語として振舞っていると結論づけている。

IV (第10章) は、本論文の総括である。

本論文は、内マア語と外マア語の文法を詳細に記述し、差異と共通点を明らかにすることを第一の目的にし、マアのコミュニティにおける、2つの変種の使用状況を、社会言語学的に考察することを第二の目的として議論を進めている。本章でそれぞれの章の記述について総括した結果、上記の2つの目的については、ある程度の達成をみたといえる。

また、本論文では、内マア語と外マア語の詳細な文法記述に際し、ほぼすべての例文において、ひとつの日本語の文に対し、内マア語と外マア語のものを同時に提示している。これは、先行研究では行われなかったことであり、内マア語と外マア語の差異と共通点をより明確にしている。

巻末付録は内マア語と外マア語の基礎語彙集である。この語彙集は、内マア語と外マア語の文法の差異と共通点を明らかにする補助資料として示すものである。湯川 (1979) を元に聞き取り調査をして採集した語彙のうち、バントゥ諸語にとって基礎的と考えられる200項目が選ばれており、それらの番号が太字で記されている。本語彙集では、これらの200項目を中心に、本論文の例文にあらわれるものも合わせて、約400項目を収録している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、タンザニア北東部、タンガ州の西ウサンバラ山塊一帯に居住する、マアの人々の民族語であるマア語を対象にした言語記述および社会言語学的研究である。この民族は外マア語、内マア語という二つの言語を母語として話すことで知られており、古くから社会言語学的に注目を浴びてきた。しかし、これら二つの言語の運用状況、共存状況などに関して詳しい調査・研究はなく、また、記述言語学的研究も非常に限られた規模でしか行われてこなかった。論者は2000年から2015年にかけて計2年4か月の現地調査を行い、両言語の記述言語学的研究を行うとともに、アンケート・インタビューによって、話者たちのそれぞれの言語の運用能力、運用状況を明らかにしている。アフリカの言語のフィールドワークはさまざまな困難を伴うが、本研究では同時に二つの言語の調査・記述を行わなければならない、その困難は倍化する。論者はその困難を乗り越えて、両言語の記述を行い、その使用状況を詳細に研究することでバントゥ言語学に対して大きな貢献をしている。

本論文はⅣ部10章からなる。Ⅰ部は先行研究の概観と本論文のもととなった調査の詳細である。また、二つの言語はその名称に関しても研究者により揺れがあるため、自称を含めて検討し、外マア語、内マア語という名称を採用している。

Ⅱ部は記述言語学的研究であり、第3章から第7章までの音韻論、形態論、統語論の記述と第8章の外マア語、内マア語の比較対照からなる。本論文の記述の特長はすべての記述、例文に関して必ず外マア語、内マア語の両方を示していることである。両言語は動詞接辞、名詞のクラス、一致のシステムに関してはほとんど共通の形式を持ち、それ以外の文法的な形態素、語彙に関して異なる形式を持っている。両者の文法的共通性と差異に関して、これまでで最も詳しい記述を与えているといえる。特に関係節の構造はこれまで詳細に記述されたことはなく、本論文が最初のものといえることができる。

第8章は第3—第7章の記述に基づいた両言語の比較である。語彙は互いに異なり、人称代名詞や形容詞、指示詞、数詞などのいくつかの文法範疇においても、内マア語と外マア語とで差異が見られるが、形態論・統語論の体系は内マア語と外マア語は多くの共通性を持つため、論者は、現段階ではふたつの変種はそれぞれに別の文法を持っているとまではいえないと結論する。

Ⅲ部は社会学的考察で、第9章のみからなる。論者は一つの民族内で複数の言語が話されている例を紹介して、さまざまな可能性を網羅的に検討し、最終的に次の5つの可能性をあげる。

- a. 異民族婚の人々のアイデンティティを表すために成立した。
- b. 秘密語として用いられる。
- c. 使用する人々が限定される。
- d. 使用される場面が限定されている。
- e. 内マア語と外マア語は、それぞれ別の人 (もしくは集団) に民族語として

話されている。

論者はまず、マア民族の成立について知られていることからaを否定する。また、マアの人たちは多くが周辺民族の言語であるシャンバー語を話すことができるが、彼らはシャンバーの人たちと話す時にはシャンバー語を話し、外マア語、内マア語を秘密語として使うことはなく、その他の場合もどちらかが秘密語として使用される場面は観察されないとしてbを否定する。C-eの可能性を検討するため、論者はインタビュー調査を実施する。内マア語と外マア語の使用については、内マア語、外マア語のどちらもが、男女共に話され、会話の内容に制限がなく、使用の場にも制限がないこと、母語話者がいること、さらに外マア語がすべてのマアの人々に習得されていること、を明らかにしている。これにより、上記の可能性のうち、cとdが否定される。マアの人々の中には、内マア語を話せる人たちと話せない人たちがおり、内マア語話者は外マア語話者とは外マア語で話す。この点から、上記の可能性のうち、eの、内マア語と外マア語は別々の集団に民族語として話されているというのが、今のマアのコミュニティの状況を最もよく表していると分析している。以上の議論から、内マア語と外マア語は、社会的にはそれぞれ別個の言語として振舞っており、マアの人たちは同一民族意識を持ちながら、異なる言語を話す集団であると結論付ける。

IV部は全体のまとめとこれからの研究の展望である。

以上のように、本論文は長期間のフィールド調査に基づく両言語の精密な言語記述および社会言語学的な調査によって、これまでその実体が不明であったマアの人々の二重言語使用について明らかにした画期的な研究であり、バントゥ言語学、二重言語使用などの社会言語学のフィールドに対して大きな貢献をなしたものといえる。

しかし、問題がないわけではない。外マア語はパレ語と明確な関係を持つことが分かっているが、内マア語に関しては言語接触によって生じた言語であることが分かっているのみでその語彙がどの言語を来源としているかに関して、先行研究を超えていない部分がある。また、内マア語を話す人は限定されることが分かっているが、それがどのような社会階層、クランに属するかなどに対する研究がされていない。しかし、これらは論者も十分意識しており、将来の研究により解決できる問題であると判断されるため、本論文の価値を大きく減じるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成28年2月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。